慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	白詩における卑下の表現
Sub Title	Expression of condescension in Bai Juyi's poems
Author	席, 暢(Xi, Chang)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2022
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.122, (2022. 6) ,p.72 (173)- 90 (155)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01220001-0072

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

白詩における卑下の表現

席　暢

一　はじめに

唐の白居易（七七二―八四六）が自らの手で編纂した詩文集『白氏文集』の巻二十八1486「与元九書」において、白居易は自身の詩を「諷諭」・「閑適」・「感傷」・「雑律」に分類している。[1] 諷諭詩は「兼済の志」として、朝廷の腐敗や社会問題を暴き、広く天下を救うことに努めるべきだと述べ、閑適詩は「独善の計」として、失意の時に、身を修め、徳を養うことを述べ、感傷詩は物事に触れ、情が生じることで吟じたものであり、雑律は五言、七言、長句、絶句などの韻と形が決まっていないものである。したがって、白詩は唐詩の多様性を全面的にを呈しているといえる。白詩について、恐らく最も注目されているのは諷諭詩と閑適詩であろう。それに関する研究も数多くある。ただし、詩の分類に関わらず、白詩においては卑下の表現が少なくない。何かの理由で自分自身を低い位置に引き下げて遜る表現や言葉が見て取れる。それらに関する分析は従来あまり論じられていない。白詩における卑下の表現は白居易の詩想の変化や人生に対する態度を反映しているため、それに力を入れて分析するに値すると思い、そして白詩における卑下の表現を分析することによって、白詩の表現をより全面的に解明するのに役に立つのではないかと考えている。一方、『白氏文集』は中国のみならず、朝鮮、日本にも伝来し、漢

詩、和歌に典拠を与える役割を果たしており、[2]『白氏文集』の鈔本と刊本が多く残っている。本稿は表現論に基づき、白詩における卑下の表現をメインに、白居易個人の経歴や主張などに基づきつつ、白詩における卑下の表現の特徴、詩想などに関して考察を行う。

二　本稿で使用する『白氏文集』の諸本と注釈書

『白氏文集』の諸本は鈔本と刊本に分けられ、さらに、鈔本は唐鈔本と伝鈔本に分けられる。

○　**鈔本（唐鈔本）**

◎　敦煌本『白香山詩集』　現存する唯一の唐鈔本。フランス国立図書館蔵。巻三、巻四、巻九の僅かな残篇しか残っていない。[3]

○　**鈔本（日本の伝鈔本）**

◎「神田本」…平安時代末期に書写された。国立京都博物館蔵。巻三と巻四のみ残存する。

◎「金沢本」…金沢文庫旧蔵本。平安時代末期から鎌倉時代の間に書写された。白居易存命中の会昌四年（八四四）に入唐僧恵蕚が蘇州南禅院で書写した『白氏文集』六十七巻本の重抄本とされる各巻（巻十二、巻四十九、巻五十二、巻五十九など）も含まれる。

◎『管見抄白氏文集』…内閣文庫蔵。鎌倉幕府時代に成立した。僅かな残篇が残存する。[4]

◎『白氏長慶集』巻第廿二…酒井宇吉氏蔵。平安中期の暢達した筆致で書写され、巻十三から巻十七までの四十二首が存在する。[5]

○　**刊本**

◎　那波本…銅活字本を江戸時代初期（一六一八）に那波道円が翻刻した木活字印本。巻一から七十一まで揃っている。
◎　馬元調刊本…民間刊本。巻一から七十一まで揃っている。
◎　官版…幕府刊本。巻一から七十一まで揃っている。

本稿は神田本と金沢本を使う。鈔本が欠いている部分は那波本で補う。なお、逸詩は研究対象とはしない。また、本稿は白詩の表現を中心に扱うため、過去に出版された『白氏文集』の注釈書を参照する必要がある。明治書院が出版した新釈漢文大系シリーズ『白氏文集』一―十三巻（一九八八―二〇一八年）、国民文庫刊行会が出版した続国訳漢文大成『白楽天詩集』一―四巻（一九二八年）、日本図書センターが出版した『白楽天全詩集』一―四巻（一九七八年）の三種類は量が多く、白詩がほとんど揃っており、訳注も充実しているため、この三つを中心に参照し、ほかには集英社が出版した『白楽天』（一九六四年）や角川書店が出版した『白楽天』（一九八八年）などを適宜参照する。本稿で白詩を引用するに際して、上記の書籍をいずれも参照したが、本稿末尾の注には最も大きく拠ったもののみ注記することとする。

三　白詩における「卑下」の表現

白詩に対して卑下のイメージを持つ人はほとんどいないであろう。確かに卑下の表現は白詩の中心のものとは言えないが、実際には卑下の表現は少なくない。本稿で全て取り上げるのは紙幅の都合上難しいため、典型的な用例のみ分類して示し、その卑下の表現の特徴、詩想などを分析し、その上になぜ白居易がそのように卑下しているのか、その原因を考察する。

(1)　文才による卑下

白居易は唐の大詩人として、歴代高く評価され、中唐の最も影響力のある詩人と言っても過言ではない。唐の宣宗皇帝は、白居易の没した後に、「弔白居易詩」を作った。「玉を綴り珠を聯ねて六十年、誰か冥路をして詩仙を作らしむ。浮雲は

系かずして名は居易、造化は無為にして字は楽天。童子は解く長恨の曲を吟じ、胡儿は能く琵琶篇を唱ふ。文章已に行人の耳に満ち、一度卿を思へば一たび愴然す。(6)」とある。この詩の内容から、白居易は優れた文才を有し、詩の神仙と言えるほど偉大で、彼の詩作は村の子供から朝廷の貴族に至るまで広く詠まれ、まさに漢詩の新境地を開いた詩人であることが分かる。『旧唐書』においては、「文に就きて行を観れば、居易は優と為り、心を自得の場に放にし、器を必安の地に置き、優遊にして歳を卒ふ。亦た賢ならざるや。(7)」とある。また、『新唐書』においては、「元稹と倶に名有り、最も詩に長ず。(8)」とある。このような歴史書では、白居易は賢く、優れた文才を有し、特に詩に長けていると評価されている。では、白居易は自分の詩に対してどのような評価をしているのだろうか。

中年の白居易はすでに文壇で活躍し、その詩作も高く評価されたが、白居易自らは自分の詩文を高く評価していないのである。0808「酬盧秘書二十韻」において、最初の一句目と二句目の「謬つて文場の選を歴、翰院の才に非ざるを慙ぢ。(9)」で自ら翰林学士に相応しい才を持っていないと説いている。本詩は元和九年（八一四）、白居易が服喪（元和六年母親が死去したため）があけ、下邽から都に戻り、太子左賛大夫の官に就いた時に盧秘書に応酬した詩である。実はその前、白居易は翰林学士（八〇七―八一一）を務めていたことがあるのである。『新唐書』「百官志一」において、「玄宗初、『翰林待詔』を置き、張説、陸堅、張九齢等を以て之を為し、四方の表疏批答を掌らしめ、文章を応和せしむ。既にして又た中書務劇を以て、文書の壅滞多くして、乃ち文学の士を選びて、号は『翰林供奉』、集賢院士と分けて制詔書敕を掌らしむ。開元二十六年、又た改めて翰林供奉を学士と為し、別に学士院を置き、専ら内命を掌らしむ。(10)」とある。この記載から、翰林学士にはかなり高い文学素養が必要であるのが分かる。前述の如く、その時の白居易の文才はすでに多くの人に認められ、翰林学士に相応しい才を持っているが、彼は本詩で敢えて卑下して翰林学士に相応しい才を持ってないと言っている。続いて三句目と四句目の「雲霄　高く暫く致すも、毛羽　弱くして先づ摧けぬ。」においてその卑下する理由を説いている。（翰林学士となり、）まるで高い空を飛ぶように一時的に立身出世できたが、結局非力でまるで羽毛がくだけ折れてしまったかのようにその職を辞めざるを得ず地方に帰った。つまり、白居易は四年間翰林学士を務めていたが、それに相応しい文才がなく、業

績も大したことがなく、翰林学士の職に見合っていないことを恥じているのである。一方で、広義的に見れば、本詩の「翰院の才」は詩文の才のみならず、「裨補時闕」の才も含んでいるだろうと考えられる。この点については(2)で後述する。

0277「題潯陽楼」において、「常に愛す陶彭澤、文思　何ぞ高玄なる。又た怪しむ韋江州、詩情　亦た清閑。（中略）我に二人の才無し、孰為れぞ其の間に来る。高きに因りて偶々句を成し、俯仰して江山に愧づ。[11]」とある。本詩は自分の文才を貶して卑下した典型的な詩であり、江州に左遷された後潯陽楼の壁に題した陶淵明、韋応物を慕った詩である。白居易は、同じ地にゆかりのある陶淵明の高玄（境地が高く玄妙）、韋応物の清閑（雅で閑適）を褒め、二人の文才を認め、思慕の念を寄せたが、自分には二人のような文才がないのに、なぜこの二人の偉大な面影を残した場所にやってきたのか、たまたま詩を作ることができたが下手くそで、二人が見たこの風景には相応しくなく、恥ずかしく思うばかりであるという気持ちを表している。潯陽出身の陶淵明（三六五―四二七）は白居易にとってまさに見習うべき詩人であり、白居易が陶淵明を慕っていたことは「予　夙に陶淵明の人と為りを慕ふ」「陶を姓とする人に逢ふ毎に、我をして心依然たらしむ。」（0278「訪陶公旧宅」）「応に須らく陶彭澤を学び取るべし」（3457「足疾」）などの詩句と一連の0212「傚陶潜体詩」からはっきりと分かる。韋応物（生没年不詳）は白居易と同じく中唐時期の詩人であり、白居易は「与元九書」において、「近歳の韋蘇州の歌行の如きは、才麗の外、頗る興諷に近し、其の五言詩は、又た高雅閑澹にして、自ら一家の体を成す。今の筆を秉る者、誰か能く之に及ばん。[12]」と高く評価している。要するに、白居易にとってはこの二人は詩文の達人で、手が届かない存在である。したがって、「我に二人の才無し」という卑下の表現をしたのは、白居易が二人に対して畏敬の念を抱いていたためなのである。『文心雕龍』「物色篇」において、「然らば、屈平の能く風騒の情を洞監する所以の者は、抑々亦た江山の助けあればか。[13]」とあり、優れた詩文は江山即ち自然風景の助けを得たものであるのが分かる。[14]白居易は、偶然に詩が出来上がったが、自らの文才は低いと思ったため、ここ潯陽楼の辺りの美しい風景に見合っていないと感じ、「江山に愧づ」というように卑下したと考えられる。

0256「自吟拙什、因有所懐」において、「詩成るも淡として味無し、多く衆人に嗤はる。上は声韻を落とすを怪しみ、下は

言詞に拙きを嫌ふ。[15]」とある。本詩は白居易が服喪した時期に作られた詩で、自分の文才を貶す意が含まれている。白居易は、詩が出来上がるたびに、自身の詩は拙くあっさりとしていて濃厚な味わいがないと思い、人々の物笑いになることが多く、上の人からは詩の韻律から外れているのを咎められ、下の人からは詩の表現の拙いのを嫌われる始末であることを詠んでいる。老年の白居易も同じように自分の詩の文才を貶していた。3250「早春即事」において、最後の句「老来　詩は更に拙なり、吟じ罷りても人の聴く少し。[16]」とある。本詩は開成元年（八三六）の作、当時の白居易は六十四歳である。本詩は早春の風景に触れて作った詩であり、前半部分は「陽光」・「雪水」・「北簷の梅」・「東岸の柳」などの早春の生気が溢れるさまを描き出しているが、詩の最後、筆致が一転し、（冬が過ぎ去り、この若々しい早春にひきかえ、）私はすでに年を取ってしまい、それとともに詩を作るのもいっそう拙くなったという詩人の悲しい気分を表している。ところで、白詩は拙いと言えるのだろうか、果たして実際に人々に批判され嘲笑われたのだろうか、確かに、中唐から晩唐にかけての間に白詩を批判する声が僅かながら存在していた。李商隠（八一三―八五八）が『樊南文集』「献侍郎鉅鹿公啓」には、「況んや詞を属するの工、言志は最と為る。魯毛の軌を兆め、蘇李の声を揚ぐより、代に遺音有り、時に絶響無し。古今制を異にすると雖も、而れども律呂帰を同じうす。我が朝以来、此の道尤も盛んなり。（中略）李杜を推すも則ち怨刺居らかに多く、沈宋に効ふも則ち綺靡甚だしと為す。[17]」とある。「綺靡」・「効沈宋」はいざ知らず、「怨刺」・「推李杜」の者は誰だろうか、謝思煒氏がそれは白居易、元稹のことを指し、具体的に「与元九書」「楽府古題序」などを言っているのだろうと示唆している。[18]さらに、謝氏は「李商隠は李杜を推賞しないわけではないが、元白を代表とする『怨刺』に偏った気風に賛成しないのである。結局、李商隠自身は『怨刺』『綺靡』を避けることができなかっただろう。李商隠は、確かに白居易の詩における『怨刺』に不満をもっているが、激しく批判してはいないのである。」と述べている。恐らく、最も激しい言葉で白詩を責めたのは李商隠と「小李杜」と並称される杜牧だろう。杜牧の『樊川文集』「隴西李府君墓志銘」には、「嘗て痛む元和より以来、元、白詩なる者有り、纖艶は逞しくせず、荘士雅人に非ず、多く其の破壊する所と為り、民間に流れ、屏壁に疏く、子父女母、口を交わへて教授す。淫言媟語、冬は寒く夏は熱く、肌に入り骨に入り、除去すべからず。[19]（後略）」とあり、露骨に白

詩を批判している。この文が作られた時期は開成二年（八三七）、白居易の晩年の時期である。このことから、白詩への批判は中唐から晩唐にかけて確かに存在していたのがはっきりと分かる。しかし白居易はいつも、それらの批判に対して反発するのではなく、敢えて卑下し、自分の詩作をからかって文才がないと言う。それはもちろん、白居易の人と争わず、淡泊な白居易自身の心境によるものであると考えられるが、一方で、白居易自身が確実にある程度は自分の作った詩を思わしくないと思っていることにも起因している。3530「首夏、南池独酌」において、「境勝りて才思劣り、詩成るも心に称はず。」とある。本詩も白居易晩年の作で、南池で独り酒を酌み、初夏の風物を愛でながら、自分の詩作には才思がなく、その風物の素晴らしさには及ばないことを嘆いた詩で、「不称心」の三文字を通して白居易の自分の詩作が思わしくないと感じている様子が見て取れる。また、前述の0277「題潯陽楼」においても同じような詩想が見て取れる。どうやら白居易は詩が出来上がっても気に入らないということがあったようで、ましてその上他人に批判されることがあったのであれば、卑下する気持ちが生じるのは理解できないものでもないだろう。しかし、それらの批判の声にも関わらず、総じて言えば、白詩は白居易が生きた時代には高く評価されたため、「上は声韻を落とすを怪しみ、下は言詞に拙きを嫌ふ。」のような自己評価はあまりにも言い過ぎではないかと考えられる。

(2)「裨補時闕」による卑下

「裨補時闕」という言葉は「与元九書」に用いられる。「登朝より来、年歯漸く長じ、事を閲すること漸く多し、人と言る毎に、多く時務を詢り、史書を読む毎に、多く理道を求めんとし、始めて知る文章は合に時の為に著すべく、歌詩は事の為に作るべきを。是の時、皇帝初めて位に即き、宰府に正人有りて、屢々璽書を降して、人の急病を訪ぬ。仆は此の時に当たりて、擢んでられて翰林に在り、身は是れ諫官たりて、手づから諫紙を請ふ、啓奏の外に、以て人の病を救済し、時の闕くるを裨補するべきも指言するに難しき者有らば、輒ち之を詠歌す。[21]」とある。「裨補時闕」とは、白居易が自ら言ったように、官界の腐敗や社会問題、暗闇を暴くこと、そして一般庶民の声を天子に聞かせることで、広く天下を救うことに努める

べきという考えである。もちろん「裨補時闕」の役割を果たしたのはほとんどが諷諭詩である。私見では、そういう「裨補時闕」による卑下は大きく三つの段階に分けられる。この三つの段階について分析する前に、まず白居易の官職を示す。白居易は生涯を通じて多くの官職を務めていた。(22)

○ 貞元十六年（八〇〇）―元和元年（八〇六）……校書郎
○ 元和元年（八〇六）―元和二年（八〇七）……盩厔県尉
○ 元和二年（八〇七）―元和六年（八一一）……翰林学士
○ 元和三年（八〇八）―元和六年（八一一）……左拾遺（兼翰林学士）
○ 元和九年（八一四）―元和十年（八一五）……太子左賛善大夫
○ 元和十年（八一五）―元和十三年（八一八）……江州司馬
○ 元和十三年（八一八）―元和十五年（八二〇）……忠州刺史
○ 元和十五年（八二〇）―長慶二年（八二二）……尚書郎中、知制誥、中書舎人
○ 長慶二年（八二二）―長慶四年（八二四）……杭州刺史
○ 長慶四年（八二四）―宝歴元年（八二五）……太子左庶子
○ 宝歴元年（八二五）―宝歴三年（八二七）……蘇州刺史
○ 宝歴三年（八二七）―大和三年（八二九）……秘書監、刑部侍郎
○ 大和三年（八二九）―会昌二年（八四二）……太子賓客、河南尹、太子少傅、刑部尚書など

厳格に言えば、白居易の「裨補時闕」の生涯は、左拾遺から始まっただろう。0014「初授拾遺詩」には、「杜甫、陳子昂、才名は天地に聒し。当時遇はざるに非ず、尚ほ無斯の位に過ぐる無し。況んや予は蹇薄なる者、寵至ること自ら意はず。白

日の光に近きを驚き、青雲器に非ざるを慙づ。[21]」とある。本詩は元和三年（八〇八）に白居易が初めて左拾遺に任ぜられた一か月後、名君の下、自らの愚鈍を恥じて、その思いを述べた詩で、当時の白居易は三十六歳である。杜甫と陳子昂は優れた大詩人として、まさに白居易が説いた「楽府の精神」を立ち返らせることに努めた偉大な先人である。白居易は杜、陳と同じ精神と主張を持っていたが、才が二人には及ばないが自分の官位が彼らより高いことを心苦しく思ったのだろう。そして「裨補時闕」の役割を果たす左拾遺の仕事をうまくこなせるか不安に思った白居易は、とにかく自分を「非青雲器」にして、低い位置に引き下げて遜れば無難だろうと考え、心の中の恥ずかしさと不安を詠んだのだと考えられる。同年、白居易は0001「賀雨詩」を書いた。当時、長江、淮水流域は大旱魃に襲われ、地元の一般庶民はその災難に苦しんでいた、白居易は被災地の住民を救済し、朝廷の浪費を減らすために、天子に対して「税収を減らし、後宮の内人を選び放たんことを請う。」という二条の奏請文（1954、1955）を奉呈し、同時にこの「賀雨詩」を書いた。詩の後半において「小臣　誠に愚陋なるも、職金鑾宮を忝くすれば、稽首して再三拜し、一言天聡に献ず。[24]」とある。「小臣白居易は誠に愚鈍な身ではあるが、（天子の寵愛で）翰林学士の末席を汚している。しかし（国と一般庶民のために）頭を地にすりつけて稽首再拜し、一言を賢明な天子さまのお耳に奉呈させて頂こう。」という訳でよかろう。ここの「小臣誠愚鈍」は言うまでもなく、天子に対して言っているものであるから、臣下が天子に対して自分を低い位置に遜るのは当然のことだろう。0033「寄唐生詩」において、「惟だ生民の病しみを歌ひて、天子の知を得んことを願ふのみ。[25]」とあるが、天子に言いたいことをうまく伝えるのは、決して簡単なことではない。臣下として自分の官位、タイミング、話術など、さまざまなことに注意しないといけない。「裨補時闕」の責務を負っていた白居易は、卑下することで天子への尊敬の思いと自分の真心を伝えようとしたのではないだろうか。当時、左拾遺になったばかりで、「裨補時闕」の駆け出しの新人であった白居易は、ひとまず遜り、卑下しさえすれば安全で、成功率が高いだろうと考え、「小臣誠愚鈍」のようなことを詠じたのだろう。これは「裨補時闕」のための卑下の芽生え、つまり第一段階である。

続いては第二段階である。新楽府の0006「観刈麦詩」において、「家田税を輸して尽きたれば、此を拾ひて飢腸に充つと。

今我何の功徳ありてか、曾て農桑を事とせず。吏禄三百石、歳晏れて余粮有り。此を念ひて私かに自ら愧ぢ、尽日　忘る能はず。[25]」とある。本詩は白居易が元和元年（八〇六）に盩厔県の尉を務めた時に作った詩で、農民の苦労を描き、耕さずして高い給料を得る自分を厳しく反省している。「此を念ひて私かに自ら愧づ」における「愧」とは、白居易が地方の役人として素晴らしい「施政」ができず、「裨補時闕」と言うにはまだまだ足りないところがあるという気持ちが表れたもので、白居易の罪悪感が見て取れる。また、0046「村居苦寒詩」において、「乃ち知る大寒の歳、農者尤も苦辛するを。我を顧みれば此の日に当たり、草堂深く門を掩ふ。褐裘に絁被を覆ひ、坐臥に余温有り。幸ひに飢凍の苦を免れ、又壠畝の勤め無し。彼を思へば深く愧づべし、自ら問ふ是れ何人ぞと。[27]」とあり、元和八年（八一三）の服喪していた時に書いたもので、大凶作に遭って苦しむ農民たちに同情を寄せ、その一方で働かずして飢餓と寒さを免れる自分を反省する詩である。本詩は「観刈麦詩」とほぼ同じような仕組みと詩想による作品である。白居易は、一生懸命働いた割には衣食住すら満足にならない農民を、力仕事をしなくても悠々自適な生活を送る自分と比べ、対照的に恥ずかしい気持ちが生じ、自らを恥じ、自らを責めずにはいられなかった。以上の二首の詩は、いずれも代表的な新楽府の詩として、白居易が説いた「裨補時闕」の役割を果たしている。しかし白居易は、このような新楽府の詩を書きながらも、自分が見聞と照らし合わせることで、自分の不足しているところに気が付いた。例えば生活に困っている一般庶民に対して自分は楽な生活を送っていることや、官位が高い割には施政がうまくできていないことなどに対する罪悪感に苛まれた白居易は、自分に対する卑下の気持ちを詩に託したのである。

ところで、白居易が左拾遺であった時に一生懸命努めた「裨補時闕」は果たして実際に効果があったのだろうか。「与元九書」には「始めて名を文章に得れば、終に罪を文章に得るも、亦た其れ宜なり。[28]」とある。白居易の「裨補時闕」は当初は影響力を持ち、彼の名も世に広く伝わったが、結局、それが原因で人生に挫折してしまった。打ちのめされた白居易は、いよいよ卑下の第三段階に進んだのである。

先の(1)で扱った0808「酬盧秘書」について改めて論じる。「翰院の才に非ざるを慙づ」という卑下の表現は翰林院に相応し

い文才がないことによるが、「裨補時闕」にも原因があると考えられる。先に引用した『新唐書』「百官志一」の記述から、詔、勅などを起草するのも翰林学士の仕事の一つであるのが分かる。また、中唐、晩唐の翰林学士は、宰相と同じように政治に参与し、天子の顧問という役割を果たしている。[29] 言うまでもなく、皇帝に意見などを申し立てるのも「裨補時闕」の一部である。したがって、白居易は四年間翰林学士を務めていたが、自身の業績が思わしくなかったために、自分には「裨補時闕」の才がなく、国を助け、民を救うことができず、その上心がやましい自分は翰林学士に相応しくないと思い、「翰院の才に非ざるを慙づ」という卑下の嘆きをしたのであろう。しかし、白居易と同時期に翰林学士の職を務めた元稹、崔群、李絳らに、白居易が及ばないと言えるだろうか。この点から言えば、第二段階と見なすこともできようが、一方で、「翰院の才に非ざるを慙づ」には、現実逃避している白居易の姿が表れているとも考えられる。当時白居易は服喪があけ、朝廷に戻って太子左賛大夫の官を務めていた。つまり白居易は太子の先生として教育職に携わることになり、すでに「裨補時闕」の仕事ができなくなっていたのである。「裨補時闕」の機会を剝奪されたため、今後たとえ諷諭詩を作っても天子に伝えられないのでは意味がないと思った白居易は、しばらく「裨補時闕」を止めたのであるが、これは、白居易の当初の理想、即ち広く天下を救済するという目標を諦めたことを意味するのではないかと考えられる。確かに白居易は『孟子』の「窮すれば則ち独り其の身を善くし、達すれば則ち兼ねて天下を済ふと。[30]」を主張しているが、太子左賛大夫の官は「窮」とは言えないだろう。白居易はそういう考えを持っていながら、「天下を救済するのを止めてはいけないのは分かるが、自身に翰院の才がなく、左拾遺の職に見合っていない上、天下を救済する権力までもが奪われて不遇になってしまったのであるから、そうせざるを得ない。みなさんご理解ください」といったような思いを詩に仄めかしている。そういう気持ちに基づいて自らを卑下したのではないかと考えられる。

同じような気持ちは江州への左遷の後に作られた詩の中からよりはっきりと見て取れる。白居易にとって人生最大の衝撃は、やはり江州への左遷であろう。元和十年六月に宰相の武元衡が暗殺された件で進言したために江州に左遷された。[31] 打ちのめされた白居易は世直しをする情熱を失い、心の中の激しい思いは次第に消えていき、閑適詩、感傷詩などを作るように

なった。閑適、感傷はほぼ「裨補時闕」の役割を果たしていないが、卑下の表現はたくさん見て取れる。彭小廬氏は、白居易の詩歌のうち、三十五首の詩に「慙」・「愧」の字が用いられ、その内訳は諷諭詩六首、閑適詩十四首、感傷詩六首、雑律詩九首であると指摘する。[32] 前述の如く、白居易は「裨補時闕」の諷諭詩を書きながら、自分の不足を痛感し、罪悪感に苛まれていた。しかし、白居易はなぜそういった思いや罪悪感を、閑適詩と感傷詩に表したのだろうか。その理由は恐らく、前に述べたように、「裨補時闕」という理想、そしてそれを達成できない現実から逃げようとしていたことにあると考えられる。0292「春遊西林寺」には、「是の年淮寇起こり、処々兵革を興す。智士は思謀を労し、戎臣は懲役に苦しむ。独り不才の者有り、山中　泉石を弄す。[33]」とある。本詩は白居易が左遷された後の元和十一年（八一六）に作られたもので、東林寺と西林寺に遊んだことを詠じた詩である。詩の前半は寺の風景の描写であるが、後半の内容は政治に関わる。当時、淮西で反乱が起こり、智略の士は謀を練るのに疲れ、武将は鎮圧するのに努めていたのに対し、白居易は江州司馬の職を務め、閑散として何も出来ない。不遇、不才のせいで山中でのんびりと泉石と遊ぶしかないという現実、そして白居易の悲しみや卑下の気持ちが見て取れる。白居易の悲しみが大いに詠み込まれている一方で、「ここまで堕ちたのは朝廷のせいで自分の本意ではない。もともと不才の私はこんな不安定な社会に対して何ができようか」といったような、現実から逃げたいという気持ちも表現されている。同じく元和十一年の作である0284「読謝霊運詩」には、「豈に唯だ景物を玩ぶのみならんや、亦た心素を攄へんと欲す。往々にして即事の中、未だ興諭を忘るる能はず。[34]」とある。白居易は、「私は謝霊運と同じように、ひたすら山水と戯れるのではなく、何かの胸中にある何らかの思いを詩に託したい。『詩経』の比興、諷諭の精神を全く忘れていない」と強調している。しかしその強調はかえって、白居易が左拾遺の官を退任した後、あまり「裨補時闕」の精神を求めておらず、専ら閑適を吟じていたという事実を証明しているのではないかと推測できる。確かに白居易の言った通り、閑適、感傷、雑律はひたすら風景を描いたものというわけではなく、さまざまな思いも込められているが、「裨補時闕」のものがほぼ見られないのは否めない事実である。しかし筆者は、白居易の閑適詩、感傷詩は他のものに劣ると言っているわけではない。ただそれらの詩に出てくる卑下の表現は、白居易の「兼済の志」から「独善の計」への変化を説明する役割を果

たしていると同時に、「裨補時闕」の理想や現実から逃げようとする白居易の姿も描き出しているのである。

以上の分析から、同じ「裨補時闕」に関わる卑下の表現とはいえ、三つの段階に分けられ、それらには細かな違いがあるのが分かる。「裨補時闕」に関わる卑下の表現は白詩に見られる卑下の表現全体の大半を占めていることからも、その重要性がうかがえよう。

(3) 年齢による卑下

白居易は、多くの詩の中で自分の年齢に言及しており、それに基づく卑下も少なくない。白居易は四十歳になってすでに年を取ったと思い始めたようである。0466「以鏡贈別」には、「我慙づ　貌の醜老なるを、鬢を繞る斑々たる雪。[35]」とある。本詩は元和九年（八一四）、下邽での作であると推測され、ある若者と別れた時に鏡を贈ったことを詠じた詩である。当時の白居易はおよそ四十三歳で、まだ中年で「老」とは言えないが、「私はうら恥ずかしいことに醜く年老いた容貌となり、鬢の毛全体を雪のようなものがまだらに取り巻いている。」と自身の老いた容貌を貶して卑下している。「老」に関する嘆きのみならず、母の死で官を退任して朝廷を去り、服喪した時の虚しさと悲しみも本詩から十分見て取れる。また、0270「贈朽直」には、「世路　祿位を重んず、栖々たる者は孔宣。人情　年寿を愛す、夭死する者は顔淵。（中略）我今信に幸ひ多し、己を撫して前賢を愧づ。已に年四十四、又五品の官と為る。況んや茲の止足の外、別に安んずる所有り。[36]」とある。本詩は元和十年（八一五）、太子左賛善大夫を務めた時の作である。白居易は、政治的に不遇だった孔子と若くして死んだ顔回の二人と自身を比較し、才と偉大さは二人には及ばない上、四十四歳まで長生きして且つ五品の官を務めたにも関わらず業績がなく、知足安分の生活ばかり送っており、いい加減に生きてきて恥ずかしいという思いを表現した。さらに、老年になった後に作った詩の中で、「老」を詠じる表現は尚更多く見られるようになり、卑下の表現も多い。3006「飽食閑坐」には、「才を懐き志を抱く者、走りて惶々たらざるは無し。唯だ此の不才の叟のみ、頑慵にして洛陽を恋ふ。[37]」とある。本詩は大和八年（八三四）に作られた洛陽閑居の生活を詠じた詩であり、当時の白居易は六十三歳である。志を抱く才能のある人々は積極的に

政治に携わって国に貢献するのに対し、年を取って老いぼれた自分は専ら洛陽の生活を享受していると述べている。これはまた(2)の「裨補時闕」による卑下の第三段階にも関わるが、「不才叟」という卑下の語から、白居易が不才というよりは、年を取ったことを強調しているのが分かる。一方、そういう「老」を詠じた詩の中で彼の悠々自適な態度も見受けられる。それは、白居易は専ら老いを悲しむのではなく、老いを楽しむ面もあることから分かる。王定璋氏は老年時期の白居易は老荘、仏教に信心深く、無為、自然、淡泊な心境を追い求め、自分の老いに対して常に余裕のある態度を保っており、「雖老不悲」の境地に達していると示唆している。2242「耳順吟、寄敦詩・夢得」の詩には、「五十六十却て悪からず、恬淡清浄心安然たり。[38]」とあり、確かに彼の「老」に対する淡泊で安逸な心境が見て取れる。したがって、それらの卑下の表現は単に年を取った悲しみに基づくというだけでなく、年を取ったからこその自然で淡泊な心境にも起因していると考えられる。

ただし、2527「初授秘監並賜金紫。閑吟小酌、偶写所懐」には、自分の詩の良さを認める意が見て取れる。「酒は眼前の興を引き、詩は身後の名を留む。[39]」とある。本詩は秘書監（従三品）に任命され金印紫授を賜った時の作であり、当時の白居易は五十六歳である。白居易は昇進の喜びによって、自ら自分の詩を認め、自分の名を詩のおかげで後世に伝えることができると信じ込んでいる。このような表現は、『白氏文集』においては極めて稀である。白居易が自分の詩のどのような点を評価したのかについて本詩で言及していないが、少なくとも自分の詩に対してポジティブな評価をしていたことがうかがえる。

四　おわりに

本稿では、今まであまり論じられてこなかった白詩における卑下の表現を扱った。それらの卑下の表現を「文才による卑下」・「『裨補時闕』による卑下」・「年齢による卑下」という三種類に分け、特徴や詩想などを分析し、それぞれの違いを明確にした。加えて白居易がそのように卑下した原因を突き止めた。「文才による卑下」に関して、白居易は自身に文才が無

いと思っており、自身の詩に対する評価は低く、加えてその時期に白詩を批判する声が僅かながらも存在していたこともあり、詩の中で卑下の気持ちを表したのである。「『裨補時闕』による卑下」に関しては、白居易は政治家として、特に最初は翰林学士、左拾遺の官を務めていたものの、その官職に相応しい施政ができておらず、一般庶民を救済できないことに対して罪悪感を感じ、その気持ちを詩に託したのである。「年齢による卑下」に関しては、白居易は自分の年齢の変化に敏感であり、常に詩の中で自分の年齢に言及している。とりわけ老いに関する描写が多く、白居易の老いに対する心境が見て取れる。それに起因して白居易は卑下の気持ちを詩に表現した。これらの中で最も重要度の高いと考えられるものは「『裨補時闕』による卑下」であり、「裨補時闕」に関わる卑下の表現の変化には三つの段階が存在していることも明らかにできた。第一段階において、翰林学士、左拾遺を務め始めたばかりの白居易は、天子に詔を起草して意見を申し上げ、政治と社会の闇を暴き、一般庶民の声を天子に聞かせる役割を果たせるだけの才が自分にあるのか不安に感じていたため、とりあえず遜ることでその役割を果たそうとし、その気持ちが詩に反映された。第二段階において、長年にわたってすぐれた施政ができておらず、苦しい生活を送る一般庶民に申し訳ないと思っていた白居易は、天下を救済する使命を果たせないことへの罪悪感によって自身を卑下した。第三段階において、左拾遺の官を退任し、朝廷から地方に移って悠々自適な生活を送っていた白居易は、当初の「裨補時闕」の理想から次第に離れてしまっているのに気付き、理想を達成できなかった原因を釈明し、みんなの理解と許しをもらうために卑下の表現を用いた。この三つの段階における表現の変化は、白居易の詩想の変化や人生に対する態度の変化が反映されたものなのである。

本稿は従来扱われてこなかった卑下の表現を調査対象とし、そこに白居易自身の詩想や態度の変化が表れていることを明らかにでき、この点は白詩の全面的に解明する上で有意義なものであると言える。しかし、例えば他の詩人の作品における卑下の表現との比較など、さらなる考察の余地もある。これらについては今後の課題としたい。

註

(1) 訓読と訳注は岡村繁『新釈漢文大系　白氏文集 五』（明治書院、二〇〇四年）三八一―三八二頁を参照。原文は「自拾遺来、凡所遇・所感、関於美刺興比者、又自武徳迄元和、因事立題、題為新楽府者、共一百五十首、謂之諷諭詩。又或退公独処、或移病閑居、知足保和、吟玩情性者一百首、謂之閑適詩。又有事物牽於外、情理動於内、随感遇而形於嘆詠者一百首、謂之感傷詩。又有五言・七言・長句・絶句・自一百韻至両韻者四百余首、謂之雑律詩。」「与元九書」の引用は以下同じ。

(2) 太田次男「平安時代における白居易受容の史的考察（上）」（『史学』第三十二巻第四、一九六〇年四月、四〇二―四四二頁）を参照。

(3) 花房英樹『白氏文集の批判的研究』（彙文堂書店、一九六〇年）「諸本の本文」（一一三―一九八頁）を参照。

(4) 陳狆一「『管見抄白氏文集』の発見経緯とその奥書に関する考釈　―宗尊親王と石清水八幡宮田中坊との関わり―」（『中国中世文学研究』六十八号、二〇一六年九月、二七―四一頁）

(5) 注(3)花房氏前掲書、一四三―一四六頁を参照。

(6) 陳貽焮主編『増訂注釈全唐詩』第一冊（文化芸術出版社、二〇〇一年）四八頁。原文は「綴玉聯珠六十年、誰教冥路作詩神仙。浮雲不系名居易、造化無為字楽天。童子解吟長恨曲、胡儿能唱琵琶篇。文章已満行人耳、一度思卿一愴然。」

(7) 『旧唐書』（中華書局、一九七五年）「列伝第十三、白居易伝」（四三四〇―四三六〇頁）を参照。原文は「就文観行、居易為優、放心於自得之場、置器於必安之地、優遊卒歳、不亦賢乎。」

(8) 『新唐書』（中華書局、一九七五年）「列伝第四十四　白居易伝」（四三〇〇―四三〇七頁）を参照。原文は「与元稹俱有名、最長於詩。」

(9) 訓読と訳注は注(1)岡村氏前掲シリーズ『白氏文集　三』（明治書院、一九八八年）二二四―二二七頁を参照。原文は「謬歴文場選、慙非翰院才。雲霄高暫致、毛羽弱先摧。」

(10) 注(8)前掲『新唐書』「志第三十六、百官一」（一一八一―一二〇三頁）を参照。原文は「玄宗初、置『翰林待詔』、以張説、陸堅、張九齢等為之、掌四方表疏批答、応和文章。既而又以中書務劇、文書多壅滞、乃選文学之士、号『翰林供奉』、与集賢院士分掌制詔書敕。開元二十六年、又改翰林供奉為学士、別置学士院、専掌内命。」

(11) 訓読と訳注は注1岡村氏前掲シリーズ『白氏文集 二上』（明治書院、二〇〇七年）二四一―二四三頁を参照。原文は「常愛陶彭

(12) 澤、文思何高玄。又怪韋江州、詩情亦清閑。（中略）我無二人才、孰為来其間。因高偶成句、俯仰愧江山。」

(13) 「与元九書」（三八八―三八九頁）を参照。原文は「如近歳韋蘇州歌行、才麗之外、頗近興諷、其五言詩又高雅閑澹、自成一家之体。今之秉筆者、誰能及之。」

(14) 原文や訓読、訳注は戸田浩暁『新釈漢文大系　文心雕龍　下』（明治書院、一九七八年）六二四頁を参照。原文は「然屈平所以能洞監風騒之情者、抑亦江山之助乎。」

(15) 注11岡村氏前掲書同頁、「江山」の訳注について、『文心雕龍』「物色篇」を引用し、すぐれた詩文とは江山すなわち自然の助けを得たものであると説明している。

(16) 訓読と訳注は注(11)岡村氏前掲書一七六―一七九頁を参照。原文は「詩成淡無味、多被衆人嗤。上怪落声韻、下嫌拙言詞。」

(17) 訓読と訳注は国民文庫刊行会『国釈漢文大成　白楽天詩集　二』（国民文庫刊行会、一九三〇年）三六〇頁を参照。原文は「老来詩更拙、吟罷少人聴。」

(18) 李商隠『樊南文集』（上海古籍出版社、一九八六年）一八六―一八九頁を参照。原文は「況属詞之工、言志為最。自魯毛兆軌、蘇李揚声、代有遺音、時無絶響。雖古今異制、而律呂同帰。我朝以来、此道尤盛。（中略）推李杜則怨刺居多、効沈宋則綺靡為甚。」

(19) 謝思煒『白居易集総論』（中国社会科学出版社、一九九七年）所収「白居易与李商隠」（四三二―四三五頁）を参照。原文は「中唐推李杜的是誰呢、人們立刻会想到白居易的『与元九書』和元稹的『楽府古題序』。元、白不只是一般地推崇李杜的風格和成就、而且真正将李杜的精神（実際主要指杜甫）帰結為『怨刺』。李商隠并非否定推崇李杜的一般論調、只是不満這種僅強調怨刺的偏巧、這裏的批評対象無疑即是元、白。」（中唐の時期に李白、杜甫を称賛したのは誰だろうと言えば、人々はすぐ白居易の「与元九書」と元稹の「楽府古題序」を思い付くだろう。元稹と白居易は単に李白と杜甫の風格や業績のみを称賛したわけではなく、さらに李白と杜甫の精神（実際には主に杜甫を指す）を『怨刺』に纏めた。李商隠は李白と杜甫を称賛する一般的な論調を否定しているのではなく、ただ『怨刺』だけを強調するという偏りに不満を持っているのである。ここで批判の対象となっているのは間違いなく元稹と白居易である。）

杜牧『樊川文集』（上海古籍出版社、二〇〇七年）一三六―一三八頁を参照。原文は「嘗痛自元和以来、有元、白詩者、纎艶不逞、非荘士雅人、多為其所破壊。流於民間、疏於屏壁、子父女母、交口教授。淫言媟語、冬寒夏熱、入肌入骨、不可除去。（後略）」

(20) 訓読と訳注は注(1)岡村氏前掲シリーズ『白氏文集　十二上』（明治書院、二〇一〇年）二四八―二四九頁を参照。原文は「境勝才思劣、詩成不称心。」

(21) 「与元九書」（三六五頁）を参照。原文は「自登朝来、年歯漸長、閲事漸多、毎与人言、多詢時務、毎読史書、多求理道、始知文章合為時而著、歌詩為事而作。是時皇帝初即位、宰府有正人、屢降璽書、訪人急病。仆当此時、擢在翰林、身是諫官、手請諫紙、启奏之外、有乙可下以救済人病、裨補時闕、而難於指言者、輒詠歌之。」

(22) 白居易の官職については、注7前掲『旧唐書』、注(8)前掲『新唐書』に基づく。

(23) 訓読と訳注は注(1)岡村氏前掲シリーズ『白氏文集　一』（明治書院、二〇一七年）一六五―一六七頁を参照。原文は「杜甫陳子昂、才名聒天地。当時非不遇、尚無過斯位。況予蹇薄者、寵至不自意。驚近白日光、慙非青雲器。」

(24) 訓読と訳注は注(23)岡村氏前掲書一一一―一二一頁を参照。原文は「小臣誠愚陋、職忝金鑾宮。稽首再三拜、一言猷天聡。」

(25) 訓読と訳注は佐久節『白楽天全詩集　第一巻』（日本図書センター、一九七八年）六五―六八頁を参照。原文は「惟歌生民病、愿得天子知。」

(26) 訓読と訳注は注(23)岡村氏前掲書一四五―一四七頁を参照。原文は「家田輸税尽、拾此充飢腸。今我何功徳、曾不事農桑。吏禄三百石、歳晏有余粮。念此私自愧、尽日不能忘。」

(27) 訓読と訳注は注(23)岡村氏前掲書二八〇―二八三頁を参照。原文は「乃知大寒歳、農者尤苦辛。顧我当此日、草堂深掩門。褐裘覆絁被、坐臥有余温。幸免飢凍苦、又無壠畝勤。念彼深可愧、自問是何人。」

(28) 「与元九書」（三七四頁）参照。原文は「始得名于文章、終得罪于文章、亦其宜也。」

(29) 葉煒「信息与権力：従『陸宣公奏議』見唐後期皇帝、宰相与翰林学士的政治角色」（『中国史研究』第一号、二〇一二年四月、四九―六七頁）。

(30) 原文や訓読、訳注は宇野精一『全釈漢文大系　孟子』（集英社、一九七三年）「尽心章句上」四四六―四九二頁を参照。原文は「窮則独善其身、達則兼済天下。」なお、白居易の「窮則独善其身、達則兼済天下。」は「与元九書」に見られる。原文は「微之。古人云、窮則独善其身、達則兼済天下。僕雖不肖、常師此語。」「与元九書」（三八四―三八五頁）を参照。

(31) 注(8)前掲『新唐書』同列伝四三〇二頁を参照。

(32) 彭小廬「白居易詩中『慙』『愧』的心理分析」（『江西教育学院学報（社会科学）』、第三一巻第四期、二〇一〇年八月、六六―六八頁）。この論文は白居易の詩における「慙」・「愧」の表現を分析し、白居易が自ら「慙」・「愧」と感じた要因について論じた

ものである。「慙」・「愧」の表現は卑下の表現の一部と見なされる。

(33) 訓読と訳注は注(11)岡村氏前掲書二六九―二七一頁を参照。原文は「是年淮寇起、処々興兵革。智士労思謀、戎臣苦懲役。独有不才者、山中弄泉石。」

(34) 訓読と訳注は注(11)岡村氏前掲書二五八―二六〇頁を参照。原文は「豈唯玩景物、亦欲摭心素。往々即事中、未能忘興諭。」

(35) 注(1)岡村氏前掲シリーズ『白氏文集　二下』（明治書院、二〇〇七年）五六五―五六六頁を参照。原文は「我慙貌醜老、繞鬢斑斑雪。」

(36) 訓読と訳注は注(25)佐久氏前掲書五五七―五五九頁を参照。原文は「世路重祿位、栖々者孔宣。人情愛年寿、夭死者顔淵。（中略）我今信多幸、撫己愧前賢。已年四十四、又為五品官。況茲止足外、別有所安焉。」

(37) 訓読と訳注は注(1)岡村氏前掲シリーズ『白氏文集　十一』（明治書院、二〇一五年）九三―九五頁を参照。原文は「懐才抱志者、無不走惶々。唯此不才叟、頑慵恋洛陽。」

(38) 訓読と訳注は注(1)岡村氏前掲シリーズ『白氏文集　九』（明治書院、二〇〇五年）九〇―九三頁を参照。原文は「五十六十却不悪、恬淡清浄心安然。」

(39) 訓読と訳注は注(38)岡村氏前掲書四六五―四六六頁を参照。原文は「酒引眼前興、詩留身後名。」